

学習活動⑦ 総合的な学習の時間と関連した社会科授業

1. 単元名 第2学年 社会科「身近な地域の調査」

2. 単元目標
- ・身近な地域を実際に歩き、フィールドワークをする中で、地域の課題を見い出し、多面的多角的に解決を図る。
 - ・総合的な学習の時間で培ったスキル（プレゼンの仕方、職場体験、新聞の作り方など）を活用し、「住みたいまちづくり」を実際に行う企画を立て、市役所や企業に持ち込む構想を立てる。

3. 授業構想のきっかけ

2016年9月に3日間、2年生は「総合的な学習の時間」で職場体験に行った。1つのグループが、公益財団法人松江市観光振興公社にて堀川遊覧船に関わる職場体験を行うことになった。職場体験中、事業所の方々と生徒の会話からいくつか気になる発言があった。その発言とは、次のような会話であった。

生徒A：私たちは、掃除に来たのですが、堀川遊覧船巡回コースの周りなど、ゴミ拾いに行かせてください。

事業所：私たちもしてほしいのですが、堀川遊覧船で働いている方々が、毎日の通勤時にコースを決め、ゴミを拾ってくるのです。決めたことではなく、自主的であり、話し合いながらやっているみたいです。だから、周辺にゴミがないのです。

生徒A：すごいですね。仕事じゃないのに・・・。

生徒B：私たちは、さっき堀川遊覧船に乗船して、いろいろ説明をお聞きしました。見たところ、高齢者の方々が多かったのですが、なぜですか。

事業所：私たちは、積極的に高齢者の方々を採用しています。やる気のある、元気な高齢者が多いですから。

生徒B：高齢化社会の対応にもなってますね。普通は、大学卒業した方々を採用するはずですよ。特に、台湾や韓国の方々が多いのに言葉は大丈夫なのかな。

事業者：経験豊富なため、逆に出雲弁を教えますよ。

生徒C：観光事業として、売り上げを上げないといけないのに、高齢者を採用したり、出雲弁で営業していたり、大丈夫なのですか。

上記の（ア）～（オ）は、それぞれ領域が違う。例えば、（ア）は人口と都市・村落の領域から問題を考察していく。そして、解決策を導き出していく。しかし、解決策を構想する上で、別の領域から問題を考察することも大切である。そうすることにより、今まで想像できなかった解決への方法が導き出されるかもしれない。このような理由から、社会的な見方・考え方を使って、問題解決をする場合に、（ア）の問題とは、一見関係ないような問題（オ）と組み合わせることで問題解決できないか。

さらに、総合的な学習の時間では、職場体験学習の事業所を6つのカテゴリーに分け、他のカテゴリーの生徒や同じ領域でも事業所の違う生徒同士が話し合いをして、「住みたいまち」について語り合った。このような学習形態を社会科でも行うことで、より実社会や実生活で社会的な見方・考え方を使えると考えた。

5. 探究のプロセス

(1) 身近な地域の課題を探る

生徒が身近な地域を実際に歩くことで、今まで見えなかった課題が見えてくる。普段、時間に追われながら生活しているため、ゆっくりと身近な地域を見ることはない。そこで、夏休みの宿題として、実際に歩き、身近な地域の課題を見つけ、模造紙にまとめた。

右の図1は、生徒Dがまとめたものである。課題「昔の名残りが今になって危険になっていること」、つまり城下町としての景観を大切に保存するため、鉤型路（かぎがたろ）、筋違橋（すじちがいはし）、T字路をそのまま危ないという課題。

また、図2は、生徒Eがまとめたものである。課題「水田や畑が住宅地になって、島根県や松江市としての米などの生産量の減少に、どう対応するのか」である。自分の住んでいる地域の周りには、畑や水田を埋め立てて出来た住宅地がたくさんある。後継者が減っている現実はあると思うが、このままでは米や野菜の生産量が落ち、他国や他県に頼る形になる課題。

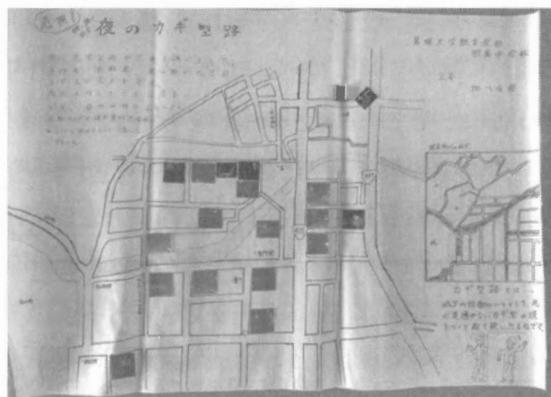


図1 生徒Dの作品

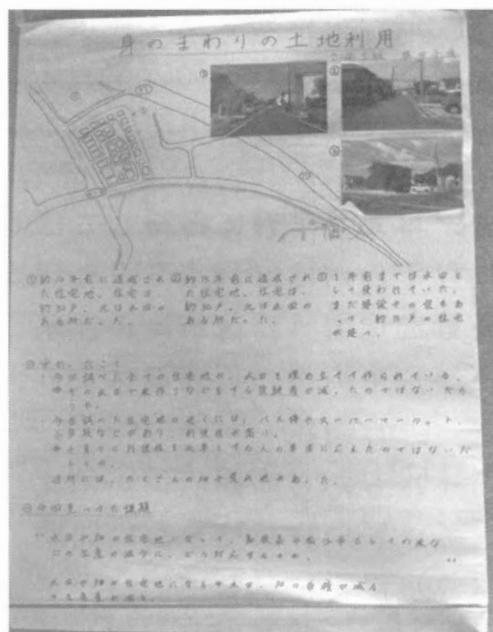


図2 生徒Eの作品

(2) 探求の過程を経由する

① 課題の設定

生徒Dは、「県民や市民の安全を守ることは大切なことである。前年度に比べ、交通事故件数は減っているものの、まだ多い。事故を減らすことで安全なまちづくりにつながるし、仕事をしやすい環境づくりにもつながる」と述べている。

生徒Eは、「私の住んでいる地域は、近年、たくさんの水田が住宅地に変化している。また、首都圏では『仁多米』などについてあまり知られていない。そこで『米の生産地であるのに、生産量が減少してきている』を松江市の課題にした。島根県は少子高齢化が進み、後継者不足などと言われるが、松江なりに米粉でお菓子をつくるなど生産量を増やすことができる」と述べている。

② 情報の収集

インターネットを利用し、生徒D、生徒Eはデータを収集した。データ収集の目的は、自分たちの解決策を関係機関に持ち込んだ時に、課題解決に向けて相手を説得する根拠とすることである。図3は生徒D、図4は生徒Eのデータである。

2年()組()番()

●職員の方々に示す資料(数字・数字以外)・・・手書き

生徒Eの課題解決策(数字以外)・・・手書き

区分	男性	女性	合計	年齢	性別	年齢	性別
H15	42	41	83	26	79	10	108
H16	54	40	94	23	90	4	134

(市庁舎、比較の資料あり)

市庁舎の定員別定員状況

区分	男性	女性	合計	年齢	性別	年齢	性別
H15	42	41	83	13	3	19	7
H16	41	35	76	21	16	21	2

図3 生徒Dのデータ

2年()組()番()

●職員の方々に示す資料(数字・数字以外)・・・手書き

島根県の総人口と高齢者(65歳以上)人口の変化と(島根県HP 島根県の高齢化率) 高齢化率

	総人口(人)	高齢者人口(人)	高齢化率(%)
H15	752,125	188,897	26.9
H17	694,352	222,648	32.5

総人口減少
高齢者人口増加
高齢化率上昇

首都圏へ行、アンケートの結果(認知度)
(東の魚沼コシヒカリ、西の仁多米、と並ぶ秋田県産の「コシヒカリ」の生産地である秋田県町あり)
この町も首都圏へ行く、イイ町人、
第一回... 2.3%、第二回... 2.5%
この町に関心を持った人、
第一回... 6.8%、第二回... 7.0%

島根県へ行、イイ町人
(島根県HP 可能性広がる島根のお米)
・「さむらい」の生産拡大、ブランド化
・除害剤なども使わない「エコ米」の栽培
・米粉をば、たうんば
・米を食べたにわりの卵

図4 生徒Eのデータ

③ 整理・分析

総合的な学習の時間において、2年生は職場体験を中心に「住みたいまちづくり」を考えていた。もちろん講演会やワークショップなど様々な体験もカリキュラムに含まれていた。そこで、社会科では身近な地域を実際に歩き、課題

(問題)を見つけることを目的としたフィールドワークから学習をスタートさせた。社会科の単元終了時の目標は、市役所や企業などの関係機関に自分たちの課題をもち込み、相手を説得し協力してもらえるプレゼンを作ることである。図5は生徒D、図6は生徒Eのプレゼン準備がわかる資料である。

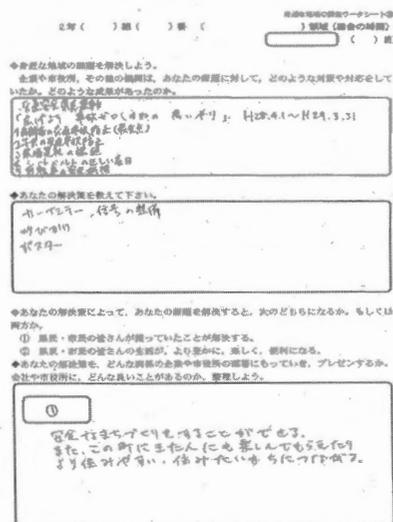


図5 生徒Dのプレゼン準備資料

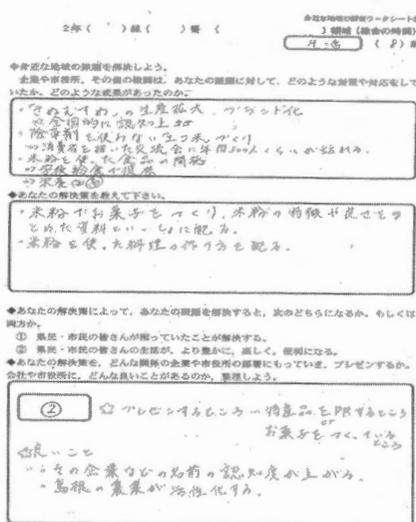


図6 生徒Eのプレゼン準備資料

④まとめ・表現

図7生徒D、図8は生徒Eがグループで行ったプレゼンの資料である。

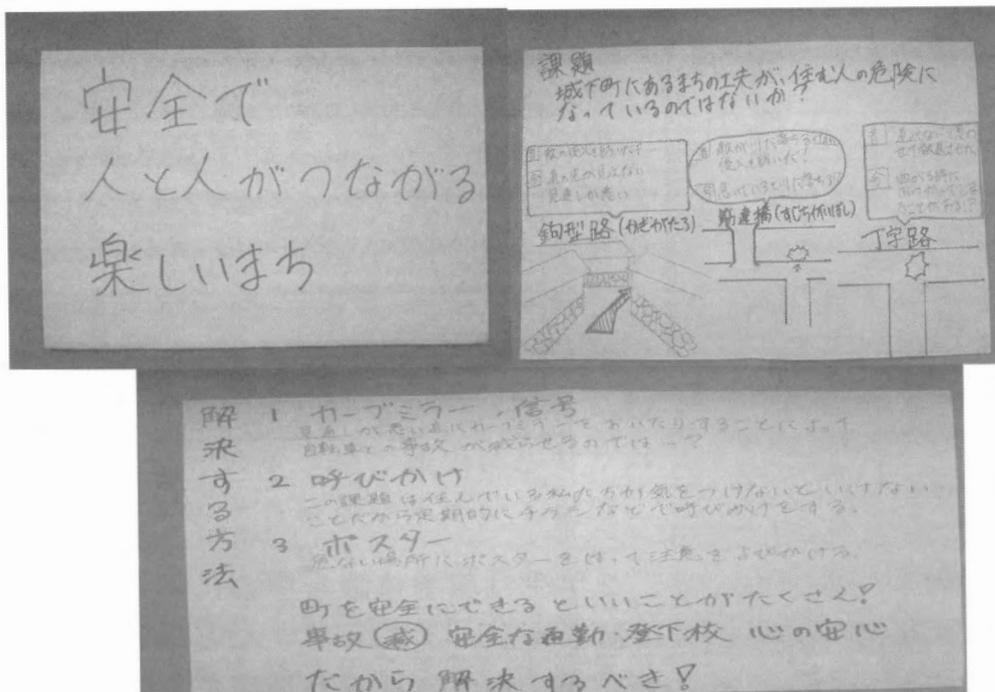


図7 生徒Dがグループで行ったプレゼン資料

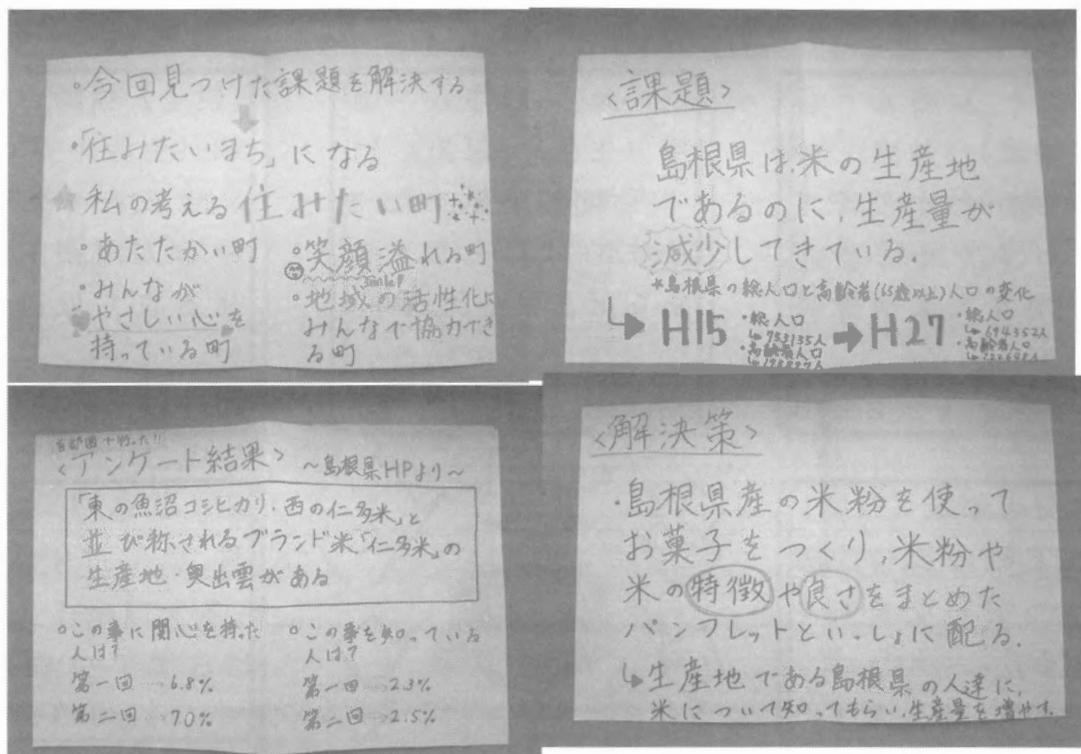


図8 生徒がグループで行ったプレゼン資料

6. 自らの考えや課題が新たに更新され、探究の過程が繰り返される

単元の初めの頃、課題は、自分だけの身近な地域の課題であった。しかし、単元の終わり頃には、市役所や企業の方々へ自分の課題や解決策を伝えるため、課題の本質は何か、その課題を解決するとどのようなまちができるのか、そのまちに住みたいと思うのか、解決のために何を協力してもらいたいのかなど、様々な立場から課題解決の構想を練るようになった。

図9は生徒Dのグループの話し合いでのワークシートである。これは他の領域もしくは別の課題と自分の課題を組み合わせ、新しい解決策を導き出す学習である。今までにない創造的な解決策を導き出すのは、今までの価値観にとらわれずに、一見出来るわけない解決策を他者と協働して創り出すことが、未来におけるまちづくりに必要なことであると生徒が気付いた時である。

図9からわかるようにDのグループでは、あらゆる世代が楽しめるまち（子ども～高齢者まで）にしたいと考えた。そのために、それぞれの世代に合った解決策を考える。若者のためにコンサート会場を作る。又は、ネットで松江のことをおもしろく伝える。高齢者が手紙を書く。Eメールより馴染みがある。しかしポストはない。障がい者や高齢者はポストまで行きづらい。それならば、バスや利用場所にポストをつける。

() さん = 領域 (観光)

課題がわかりやすい。インターネットを活用して若者を呼ぶ。

1・2・3

() さん = 領域 (生活)

手軽に手紙を出せるまちは、ステキなまちだと思った。

1・2・3

() さん = 領域 (生活)

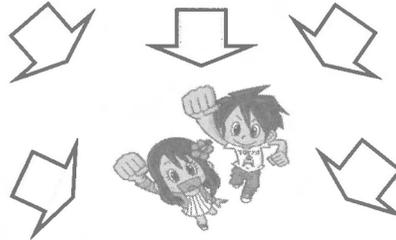
老人を中心にあらゆる人が楽しく過ごせるまちは確かに良い。

1・2・3

自分 = 領域 (環境)

城下町の風情を残しつつ安心なまちをつくる。

1・2・3



() さん = 領域 ()

1・2・3

チャレンジ

pinka.jp - 7689474

◆誰の課題 (解決) + 誰の課題 (解決) + ... を合体させたチャレンジ案か。どのようなチャレンジか。

※バスの中にポストを作る → お年寄り は 手紙をよく書く + バスを使うようになる

※空き屋を壊してライブ会場にする。 → 若者が定住する + ネット配信で宣伝・中継などをする

図9 生徒Dのグループでの話し合いのワークシート

次の図10は、生徒Eのグループの話し合いのワークシートである。

図10からわかるように、生徒Eのグループでは、住みたいまちにするために、まちルンルン革命を起業する。内容は島根県産の米を中心にして、城下町や農業のPRをする。Iターン、Uターンを積極的に呼びかける動画配信も行う。そして城下町の風情を利用して、着物を貸し出したり、観光客に体験をしてもらう形を増やす。城下町の風情や昔の伝統的料理を楽しんでもらう。ここに公共交通機関を活用することはもちろん、普段の生活の中に公共交通機関をどう盛り込んで生活スタイルを提案するか考える必要がある。

こうして、別の領域や課題が合わさり、新しいまちづくりの構想が出来ることに気付く単元であった。この単元を通しての社会科の学習は、3年生の総合的な学習の時間「Bridge IIIの地域貢献活動」に生かして行くことになる。

自分＝領域（生活）
米の減少。認知度を上げる。生産量を増やす工夫をしたい。

1・2・3

（ ）さん＝領域（環境）

公共交通機関を利用し，自家用車を減らす社会のしくみがある。

1・2・3

（ ）さん＝領域（福祉）

車社会が増えると徒歩が減るので，医療費が増大する。

1・2・3

（ ）さん＝領域（環境）

松江を有名にする。しかし静かなまちはキープしたい。

1・2・3



（ ）さん＝領域（ ）

1・2・3

◆ 誰の課題（解決）＋誰の課題（解決）＋・・・を合体させたチャレンジ案か。どのようなチャレンジか。

※徒歩社会を作ることによって，体力増進につながり，米の消費も増える。作らないと医療費が増大する。

※公共交通機関の利用で事故をなくすことで安全なまちができる。城下町の風情を残すことができる。

※静かなまちをキープしつつ，来県・来市してもらうための松江のまちPR動画を作る。

図10 生徒Eのグループでの話し合いのワークシート